

再解釈されるティンク：その成立とフォルクローレ界での受容から

山本 尋（東京大学大学院）

キー・ワード： ティンク、再解釈、「新しい歌」運動、フォルクローレ

Re-creaciones del tinku: su surgimiento y aceptación en los entornos folklóricos

HIRO YAMAMOTO (Doctorado en la Universidad de Tokio)

Keywords: tinku, re-creación, Nueva Canción, folklore

発表概要

本発表では、ボリビアをはじめとする国々におけるフォルクローレ音楽の楽曲や舞踊の演目として知られるティンク (*tinku*) の成立と普及について、現時点で手に届く資料や先行研究をもとに通時的に振り返る。ティンクとは本来、ボリビア・ポトシ地方を中心に見られる豊穡祈願の祭礼であるが、ここ約 50 年の間に、さまざまな他者の創作的意図のもとに再解釈を受けてきた。本発表ではティンクがとある「楽曲」から「リズム形式」となり、「民俗舞踊」となるまでの変遷を明らかにしながら、これら「祭礼でないティンク」の登場がいかなる状況に端を発し、何を喚起するのかをひもといていく。

本発表はフォークロアに対する構築主義的な批評の一端をなすが、ここでのフォークロアは民衆の土着的な生活慣習そのものを指さず、それらを社会的、文化的な他者が何らかの目的で表象した所産を指す。職業音楽家によるフォルクローレ音楽の LP 録音や、ボリビアで見られる創作色の濃い民俗舞踊はその典型といえる。

1. 「新しい歌」運動の中のティンク

「ティンク」はまず、フォルクローレ音楽における楽曲として音楽シーンに取り込まれる。この過程を担ったのが、チリ出身の歌手ビクトル・ハラ (Victor Jara) および、同氏と交流のあったチリの音楽グループ、インティ・イリマニ (Inti Illimani) であり、それぞれ 1970 年と 1973 年に、アップテンポのリズムを持つ「エル・ティンク (El Tinku)」ないし「ティンク」という同一の楽曲を各々の LP に収録している。いずれの音楽家も、ラテンアメリカ各国で軍事政権が台頭する

1960 年代から 1980 年代にかけて広く興隆した社会派の音楽的潮流である「新しい歌」 (*Nueva Canción*) 運動における草分け的な立ち位置にある。

ボリビアにおける同運動の代表的担い手には歌手ルイス・リコ (Luis Rico) がいるが、同氏はティンクを曲名ではなくリズム形式とした上で、「旱魃の唄」 (*Coplas de la Sequía*) と題される新たな楽曲を 1982 年に作曲した。同年から翌年にかけてアンデス地域で実際に起こった旱魃を取り上げたナンバーである。荒廃した耕作地を後にして都市に流れ着き、やむなくコカイン製造労働に手を染めたポトシ地方出身の農民からリコが聞き取った顛末がそのまま歌詞となっている [リコ氏 2022 年 5 月 14 日付]。この曲は 1985 年に LP リリースされた。

「新しい歌」運動の中で再解釈されたティンクの背後には、創作者と現地の人々との直接的な交流がある。この点は、ハラたちによる先述の楽曲「ティンク」においても例外ではない。Torres [1996:47] によれば、この楽曲は、当時チリに足を運んでいたボリビア人の行商人を通じて彼らが学んだ土着的な歌がもとになっているという [Torres 1996:47]。

附言すれば、「ティンク」と称される楽曲ないしリズムが収録されたボリビアで初めての LP はリコのものではない。管見では、音楽グループ、ロス・タキパヤス (Los Taquipayas) による 1976 年の作品がそれである。「新しい歌」運動と同グループとの結びつきは必ずしも明らかでないものの、収録されているティンク曲はハラらと全く同じものである。この一致が示すのは、後にボリビアにおけるフォルクローレの代表的なリズム

形式として数多の楽曲や舞踏の演目を受け入れるかの「ティンク」が、チリからの逆輸入に始まって成立した可能性である。

2. ボリビアの国民的舞踏として

1980年代初め頃、「ティンク」の名を冠する民俗舞踏がボリビアで創作され、1990年代から都市部において人気膨らむ。Sigl[2012:294-297]によれば、この踊りの幅広い受容を促したのが舞踏グループ、ウイストゥス(Los Tinkus Wist'us)の登場である。一方でその構成員は農村出身者と日頃の交流を欠く非先住民のエリート層に占められ、同研究者はこれをティンクの「白色化」と喝破する [Sigl 2012:294-297]。

発表者が同グループの創始メンバーC氏に行ったインタビューでも、「白人の容貌を備えた大学生という自分たちが先住民の衣裳を着たことで、ティンクの踊りに対してかつて向けられた悪評が乗り越えられた」という旨の主張が聞かれた [C氏 2019年7月4日付]。前述の早魃によって農民や先住民が被った貧困が、都市の人々にある種の偏見を植え付けたことも想像に難くない。

人々の間にある現実的な断絶をよそに、今日ティンクの踊りはボリビア国民の文化的帰属をめぐる感情と分かちがたく直結している。拙論文 [2021:25-26] で示したように、この踊りがチリなどの隣国から模倣されることへの危機感を示す言説はよく聞かれ、2011年7月には同舞踏を「100%ボリビアのもの」と宣言する大きなイベントが催されたほどである [Yamamoto 2021:25-26]。

上述のようなナショナリズムや、現地の人々との交流を伴わない舞踏実践は、「新しい歌」運動が打ち出した国境を越えた民衆の紐帯という理念と齟齬を来す。この上で、本発表でいう「ティンク」が他ならぬチリ出身の音楽家によってフォルクローレ界にもたらされたとすれば、当初の状況に対して現状がなすアイロニーは大きいものとなる。今後の研究においてこの意味が問われる。

【主要参考文献】

- Sigl, Eveline, 2012, Etnicidad, poder y género. En *No se baila así nomás... Tomo I*, Eveline Sigl, David Mendoza-Salazar, pp.29-337, La Paz.
- Torres, Rodrigo, 1996, Víctor Jara; el artista y su obra. En *Víctor Jara: obra musical completa*, Compilado por Gonzalo Badal, y Carlos Altamirano, pp.25-55, Ocho Libros Editores, Santiago de Chile.
- Yamamoto, Hiro, 2021, Más allá de la folklorización: una reflexión etnográfica en torno a los movimientos reivindicativos del *tinku* en Bolivia. *Iberoamericana* 42(1):19-31.

LP 盤

- Inti Illimani, 1973, *Canto de pueblos andinos*, EMI.
- Los Taquipayas, 1976, *Los Taquipayas*, Lyra.
- Luis Rico, 1985, *Luis Rico*, Lyra.
- Víctor Jara, 1970, *Canto Libre*, Odeon.